

# 11. 水車

井路（用水路）から田に水をくみ上げる水車で、標準名は踏車（ふみぐるま）。ひろく全国的に使われたが、低湿な摂津市域では洪水時の悪水の排水にも活躍した。

## 標準名は踏車（ふみぐるま）で

摂津市域での呼称はミズグルマ。スイシャ、ミズカキグルマという言葉も聞いた。

農具は地方によって呼び名が異なるので混乱も起こる。一般にスイシャ、ミズグルマといえば、山の急流に掛けてコットンコットン米搗きをする水車を始めとして、広く水力を動力として使うものを指す。江戸時代の『農具便利論』には摂津市域でいうミズグルマを「踏車（ふむぐるま）」と呼んでおり、標準名は踏車とするのが適切だろう。

## 足で踏んで灌漑

<A>の踏車は水車の直径 164 cm、羽根は 17 枚で大型の部類である。踏車は<B>のように羽根の縁に乗って階段を上るように踏む。すると体重で車が回って羽根が水をかき揚げ、樋から田に水が流れ込むという仕掛けである。水車のスポークは細い材を使いながら互いに組みあって強度を保っており、踏むにも担ぐにも軽くて丈夫な工夫がみられる。

## 排水用には 2 人踏み、3 段掛けも

大型の踏車には羽根の頂点を補強棧で繋いだものもあり、2 人踏み用と聞いた。悪水の排水には共同であったが、上・中・下 3 段で 6 人踏みの水車が戦後まで残っていた。

## 300 年余り前に大坂の町で開発

<C>は大蔵永常の『農具便利論』（1822）の踏車の分解図。「昔、井路の水を高みの田へ揚げるには諸国一般に龍骨車を用いていたが、寛文年中（1661～73）に大阪農人橋の京屋七兵衛、同清兵衛という人がこの踏車を製作し、宝暦・安永（1751～81）の頃までに諸国に広まり龍骨車を使う地方は少なくなった」という。

## 水車の前は龍骨車

<D>は『絵本通宝志』に描かれた龍骨車。路車が発明される以前の灌漑用水車の主力。龍骨車は中国で開発され、戦国時代に輸入されて広がった。

龍骨車はチェーン方式なので部品数と連結部分が多く、メンテナンスが大変である。それに比べて路車の方は可動部分は回転軸だけで壊れることは少ない。それに軽くて分解して一人で田まで担げる。さらに足踏み式なので体重が利用できて疲れが少ない。ただ揚水能力は落差数 10 cm で龍骨車には及ばないが、井路から田へかきあげるには十分だった。

路車は江戸時代、300 余年前に大阪で開発されたヒット商品なのである。

